

思えば満洲国境にソ連軍が侵攻してきた昭和二十年八月七日、新京防衛軍は市街北方寛城子に展開してソ連軍と決戦の時を待機していた。十四日朝、友軍砲兵陣地の角型眼鏡はソ連戦車部隊をとらえたと情報が入った。

決戦の時刻は十四日夕刻から十五日朝にかけての戦闘が想定された。この時、防衛軍司令官より「全軍特攻となり悠久の大義に生きんとす。軍は富嶽特別攻撃隊と呼称する」と命令が全部隊に伝達された。

ソ連軍戦車部隊は新京攻略を目指して蒙古草原を東へ進み新京を目前にして体勢を整え、一気に攻撃してくるものと予測された。

両軍決戦の時は刻々と迫っていた。十五日朝、敵戦車部隊は第一線陣地の前に姿を見せなかった。

新京防衛軍一万の将兵が、特別攻撃隊となって敵戦車軍団に突入し玉砕を敢行せんとした昭和二十年八月十五日は終戦となった。

終戦後、部隊は新京編成第四梯団となりソ連に渡った。二十年九月二十三日仲秋満月の夜、ウスリー河を渡ってブラゴエに上陸、シベリ鉄道を西に進んでバイカル湖を通過イルクーツク・ノボシベリスク・更に南下してアルマアタ・タシケントを経て終着駅アングレンに到着した。その夜パミール高原の山に満月がかかっていたことからウスリー河を渡ってから三十日間の貨車輸送であった。

この間、食糧の支給は無く長途の疲れから多くの病人が出ていた。下山氏は開拓団として満洲に渡り召集されて始めて兵隊となった者で三五

歳位であった。戦乱の満洲に残した家族に想いを馳せ痛恨の涙を飲んで異国の山奥に永眠したのである。

日本帰還の夢も空しくアングレンの荒野に露と消えた多くの兵士達は戦後四十九年の星霜を経た今もパミール高原アングレンの山奥に、訪づれる者もなく眠っている。

パミールにかかる月は今夜も日本兵墓地を照らしているであろう。

平成六年七月八日記す